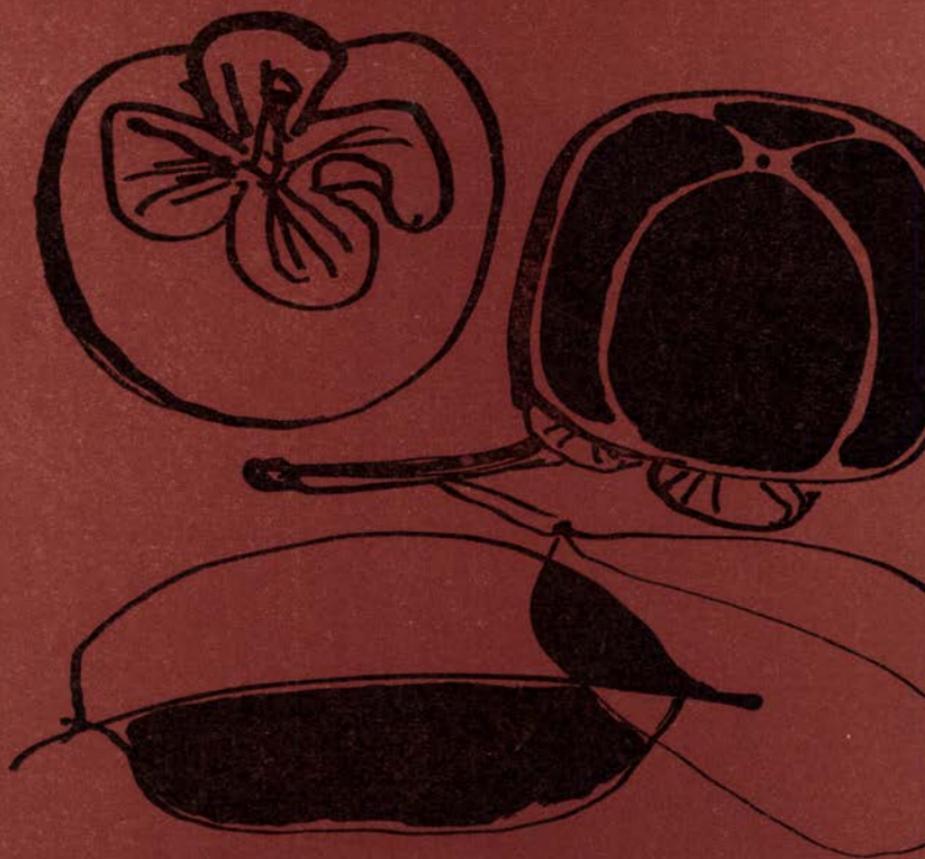


凡人

川雜叢書



---

浜田久米雄句集

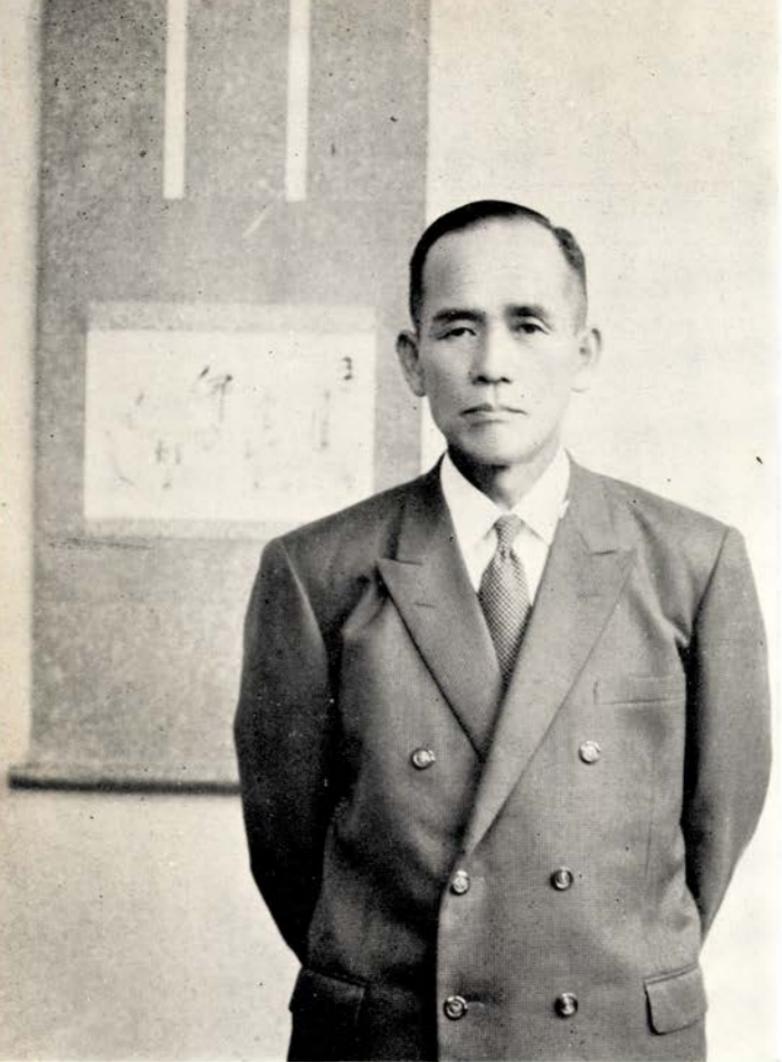
凡人



1963・11

川柳雜誌社版

---



著 者

凡人目次

春

十句……………(二)

酒

十二句……………(三六)

夏

八句……………(一三)

国鉄

七句……………(五〇)

秋

四句……………(二二)

身辺句

廿五句……………(五八)

冬

六句……………(二八)

句会・雑誌など

廿八句……………(八四)

## 序

吹けば飛ぶよな将棋のコマに、その一生を打ち込む人もあれば、僅か十七音字にその半生を惜しみなく浸る人もある。

どんなささいなことでも、その道一筋にいそしむことは実に尊いことだ。そこにはいつのほどにか、ある業績が残るからだ。

浜田久米雄君は岡山県の産だが三十年という、永い歳月を国鉄一路で頑張り続けているし、趣味も又柳歴三十年を数え少しも倦むことを知らない。そして川柳不朽洞会員の古参株の一人だ。

とうとう、個人句集を遺すところまで漕ぎつけた。題して「凡人」。しかし、ただの凡人でないことは、この句集の特異な発表振りを一見すれば、すぐにもうなずきうるであろう。句は数千句の中から僅に百句を選び出したものであるが、その一句一句に、作者としての感興を喚んだ作句当時の詩情を簡単に、平易に、記していることである。そこに作者

自身の環境や性格が余ますところなく描出されていて、私たちの胸底に、ひしひしと春の日射しのように穏やかに迫まり、知らず知らず作者の句境にとけこまされるからである。

ここまで来ればたとえ作者が凡人であろうとも、俗人でないことだけは確かだ。非凡人というものは、そうザラにあるものではない。作者が凡人であることを自ら悟るところに幸福な人生のあることを思えば、君のために祝福せざるを得ない。

一九六三の初秋

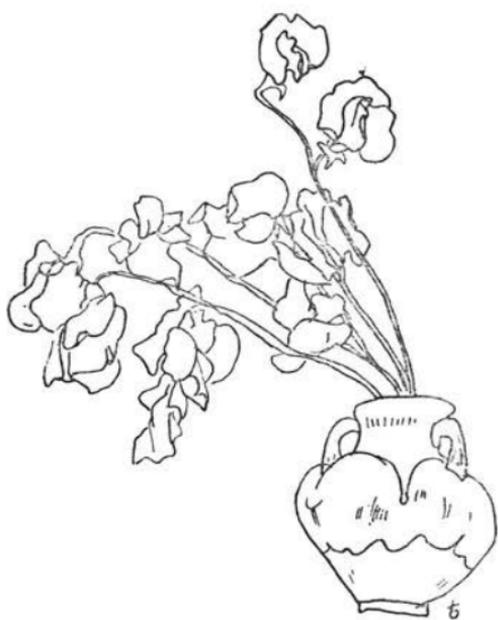
川柳雑誌社編集局にて

麻 生 路 郎 識

表紙	題字
野尻	麻生路
弘	郎

---

# 春



う 猫 春  
つ の の  
り あ 風  
か く  
け び  
が

せめて春の一刻ぐらい、あくびをつ  
づけさまにして放心状態にありたい  
ものだ。

捨  
て  
ら  
れ  
た  
葱  
か  
ら  
葱  
が  
の  
び  
て  
春

万物春の息吹きを感じているのだから葱の根もしっかりと大地に吸いついていた。

麦の青  
寒さを越  
来た青さ  
して

麦の青さに魅力を感じる。これは  
秋から冬へと育て、来た百姓の持  
つたのしみである。そして人生へ  
の教訓でもある。

春の歌  
みんな  
大きな  
口を開け

冬から開放された気持や歌の持つ  
春らしさが人の子を無邪気にする。

東 風 吹 か ば  
な ど と 昔 の  
気 に も な り

せわしさから逃れてほっとした気  
持は時々持ちたい。その時梅が咲  
いていたかしら。

卒業へ  
鯛一匹の  
ほがらかさ

娘の高校卒の祝に鯛が一匹買って  
来られた。父も母もそれを見てい  
る。これでいゝのだ。

工 事 場 の  
か 春 を 戸 板 が  
つ を 戸 板 の  
が 戸 板 が  
れ 板 が  
る が

こうした春にそむいての矛盾は  
昔から今まで続いている。むし  
ろ今の方が多いかもしれぬ。

春の夜の  
無邪気は  
折れた花  
を

若かりしころの思い出である。年  
をとるとそんな気になれない。益  
裁というような趣味が生れてくる  
から。

手  
を  
拭  
い  
て  
新  
入  
学  
の  
子  
を  
送  
り

台所仕事から手を拭いて、わが子の  
新入学を送り出す母の気持は明  
るい。麦田の空はひばりのさえず  
り。

貧乏の  
屋根を  
春の雨  
つ  
た  
つ  
て

貧乏に馴れきつてくると苦になら  
ないようになる。そして春雨の風  
情をたのしむのだ。

---

夏

桃 娘  
は 備 前 の  
が し

こととして十五年もつづく岡山駅頭の風景である。桃売娘の手から一箇五十円の水蜜桃が車窓へ吸い込まれて行く。

強　　う　　嚙  
い　　ど　　ん  
ら　　ん　　は  
れ　　は　　た  
た　　ん  
で　　ん  
喰　　で  
べ

はじめのうちは嚙まずにのみ込んで  
いるうどんではあるが、いくら  
好物でも定量がある。強いられて  
は困る。

涼　　大　　つ  
台　　き　　い  
　　　な　　て  
　　　嘘　　去  
　　　を　　に

大きな嘘の方が面白い。夏の夜話。  
聞いている方も言っているのもど  
うせ嘘だと思っっているから、さか  
らわない。

ひ 助 子  
や 太 の  
し 刀 箸  
む が へ  
ぎ 来  
る

親と子とのつながりはこんなほゝ  
えましい箸のやりとりからも深さ  
を増すのだ。

早 起 き を し て  
夏 の 陽 へ  
身 構 え る

年が寄ると朝がはやくなる。炎天下のきよしの勤めをなんとかやって行きたい。年寄りの力みだ。

負けてなるものかと  
夏の陽を避けず

戦争中広島時代の作。こんな気持ち  
でいたものだが、負けてしまった。

夏　の　雲  
負　け　て　は  
よ　う　に　湧　き　な　ら　ぬ

戦時中の句。入道雲に教えられ、  
そして頑張りつづけて来たものの。

汗 銃 次  
ふ 後 の  
い に 役  
て が  
あ  
り

防空壕、防火用水防火待避訓練等  
々々よくもまあ、あれだけやり抜  
いたものだ。不平も言わずに。

---

秋

文 句 い  
化 が の  
の ほ ち  
日 し あ  
い る  
な  
と

ある年の文化の日にこんなことを  
考えた。そしてこんな句を作った。

文 化 の 日  
よ く 晴 れ  
さ つ ま 芋 を 堀 る

実感の句であり、いつかの文化の日にさつま芋を堀りながらまとめた昔がなつかしい。

恩 菊  
給 が  
の 咲  
つ く  
く こ  
話 ろ

菊が咲くのもよい。恩給のつくのもよいが何年恩給がもらえるだろうか。

食 欲 の  
秋 へ の  
も う た ま り  
便 所 が

でも快便、快眠。快食が健康を表  
わしているしよこなのだ。



---

冬

十 二 月 八 日  
こ ゝ ろ の  
灯 を と も し

大詔奉戴日の緊張。そんな時代を  
過ごして来た人もだんだん減って  
行く。

う ひ 残  
れ か り  
し せ 福  
が た  
り 方  
も

すべてを目算に入れた商法。うれ  
しがる商法であらう。

他 師 空  
人 走 笑  
め の い  
き 空  
も

十二月の句は多い。忙しい時にこそ句は作れるのかも知れぬ。

ク  
リ  
ス  
マ  
ス  
真  
言  
宗  
も  
出  
て  
歩  
き

なぜこんなに人が出るのか。ケ  
キをたべて飲んで踊って、いまだ  
に解けぬ謎である。

易 断 は 吉  
元 日 を  
こ せ つ か  
ず

来年のこよみによって自信をつけた。さてその年はよい年であったかどうか。

焚 火 の 輪  
一 人 が 寄 輪  
一 人 が 寄 輪  
去 り 寄 輪  
ば

悠長な田舎。冬の朝である。昔はよく焚火をしたものだが今頃はめったに見られない。生活の向上か。



---

酒



湯 も 常  
が う 連  
た 来 が  
ぎ る  
り こ  
ろ  
の

よく短冊や色紙に書いて来た句。  
この句をかけておくとお客が多く  
なるとおでん屋におだてられて。

飲 む だけ の  
義 理 は あ と か ら  
つ い て 行 き

後からついてゆきに酒のみの心理があるようだ。勘定は前に行く男が払ってくれる弱味がある。

花 と ま  
だ り た  
よ こ 酒  
り と の  
な  
る  
か

花に酔い、酒に酔っているうちに  
春は毎年のように過ぎて行く。そ  
して一年たてばまた花だよりが来  
る。

嗜 好 欄  
酒 少 々 と  
書 い て 出 し

飲ける口はみんなが知っている以上書かぬわけにはゆくまい。三合とも書けず少々としておくか。

ゆ　尾　終  
れ　灯　列  
て　も　車  
着　す  
き　こ  
　　し

終列車は酔いどれ列車。だから尾灯までがふらふらして汽車がとま  
った。

一 級 酒  
恩 に 着 せ ら れ  
そ う に 着 せ ら れ  
に 着 せ ら れ  
飲 み

恩に着てもよい酔心地である。恩  
に着せられずに自分で一級酒を買  
って飲める日はいつのことか。

つ 酔  
む い  
つ ざ  
た め  
ま の  
ゝ 水  
に は  
飲  
み

酒をのまぬ人にはこの味はわかる  
まい。大分飲んで来た水、これか  
らも飲むことであらう。

さ か づ き の  
上 に も さ ら り  
秋 の 香 が さ ら り

秋の気配を感じるころの酒の味は  
一年中でもっともよい。涼しくな  
りかけたころの身体の調子にもよ  
るが。

座 布 団 を  
ま た い じ め て る  
か く し 芸

座布団がいろいろな形に変っている。周囲には手をたゝいたりげらげら笑っている大供がいる。

料 は ス  
理 じ タ  
屋 ま ン  
で り ド  
終     で  
り

はじめは軽くいくつもりだったが、  
なにしろ酒という魔性にひっぱら  
れてしまつて。

酔 ま 縄  
う だ の  
て 酔 れ  
い う ん  
ぬ て  
い  
ぬ

酔うたというのは酔っていないし  
ようこ。酔っていないというのは  
酔っているしようこ。

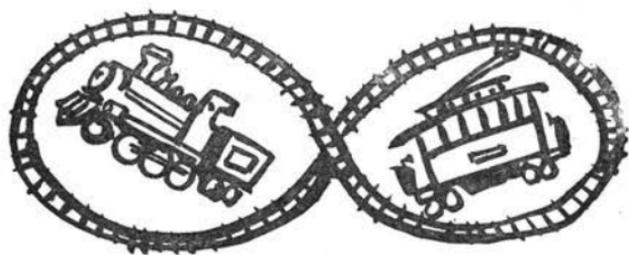
電 柱 へ  
し ん か ら  
酔 う た の が さ ば り

こんな恰好を見たこともあるし、  
なったような気がする。その時に  
フィルムが切れている。



---

国  
鉄



制 帽 で  
わ が 行 く 道 の  
は る か な る の

路郎先生選で新聞で一等になった  
感激をいま思い出す。はるかなり  
と行って歩いて来た道もあと一年  
あまりとなった。

駅長に聞けば  
間違ったいな  
い列車

時刻表がぶらさがっているのに信用がもてない田舎者の気持だ。愛される国鉄の駅長ではある。

あ  
く  
び  
噛  
み  
こ  
ろ  
し

汽 駅  
車 長  
を  
出  
し

客車の窓からこちらを見ているお  
客さんに、まさかあくびも見せら  
れまい。

下 積 み に い る  
気 易 さ の  
爪 が 伸 び

気分がのんびりしているから爪の  
伸びようも漫々のだ。けれども下  
積みにいた時の方がよかった。

虫 あ 勤  
に る 続  
さ 日 の  
も は  
似  
た  
り

人のいやがる虫けらにも似た作業  
つらつらいやと思う人生のひと  
こま。これが重荷を負うた坂道の  
図か。

鉄瓶の  
湯垢か  
山の幸  
と知り

山峡での駅長生活は鉄瓶でいゝ茶をすすることだった。大事に持って帰った湯垢は水が変ればお仕舞だった。

功績章  
汽笛のなか  
歩いて来  
かを

鉄道生活三十年、もうろく章をもち  
らった日のいつわらざる心境だ。

---

身  
边  
句



湯 も 凡  
が つ 人  
あ た へ  
ふ い  
れ な  
く  
も

自宅の風呂であらうと温泉であらうと時折感じられるもったたない湯である。湯に感謝し、もったたない気持をわが人生に捧げる。

座 座 床  
ら る 柱  
さ お  
れ 方  
が

年をとってくるうちに、ぼくもこ  
んな座り方をする機会がふえて来  
た。座るお方も大分ひっぱらぬと  
座ってくれぬのである。

伊勢さまの  
札がすま  
家内無事  
けて

何年前にお参りをしたお伊勢さまのお札である。神を信じる気持を持ち合わせているのがしあわせだ。

ひ 寝 ち  
る 卷 い  
が む ち  
え つ や  
り き ん  
で の

むつきでひるがえっているのを見  
てはじめて知るとしよりのよろこ  
びである。

二 人 と も  
銀 婚 式 の  
日 を 忘 れ

結婚して二十五年。どちらかがふ  
とこれに気づいたのは三ヶ月ほど  
後のことであった。

た 道 ふ  
の が る  
し 曲 さ  
つ と  
て の  
い  
て

ふるさとはよいもの、曲りくねった道に感じるなつかしさ。その道には四季おりおりの花が咲いている。

ま  
つ  
直  
ぐ  
に  
ま  
歩  
け  
と  
仏  
間  
灯  
を  
と  
も  
し

正直に歩いて来たから大した間違  
いもなく過ぎて来たが、正直者が  
昔から損をしている。

百 姓 と  
話 せ ば  
作 る こ と  
と ば  
か り

百姓の心理、百姓の子に生れて来たものゝ作る話はあまり好まない。

取　よ　つ  
り　う　る  
巻　に　し  
か　見　上  
れ　舞　げ  
　　　に　の

ご容態はいかがですか。ぐるりっ  
と取り巻かれた病人は来る人ごと  
におなじことはかりをくり返すの  
である。

ど  
ち  
ら  
で  
も  
よ  
い

子  
を  
願  
い

寿  
の

初孫が生れて来る親の気持。どち  
らでもよいと思っていたが女の子  
ですく／＼と伸びている。その時  
からおじいちゃんになった。

不 入 見  
覚 れ つ  
に 齒 け  
も の ら  
掃 除  
れ

入れ歯をするようになってもまだ  
人間の見栄がある。見られてもよ  
いような年令が今に来るだろう。

花 車 転  
が の 宅  
咲 上 の  
き で

盆栽に興味を持ち出してからふと  
街頭で見た引越トラックの上に赤  
い葵の花がゆれていた。

沈黙は銀なり  
無口は銀なり  
さからわす

と  
思  
っ  
て  
い  
る  
の  
が  
そ  
の  
人  
の  
性  
分  
。  
雄  
弁  
は  
金  
で  
あ  
り  
、  
意  
見  
の  
言  
え  
ぬ  
人  
は  
、  
今  
の  
世  
か  
ら  
捨  
て  
ら  
れ  
て  
行  
く  
。

肩 車  
し て ほ し い 子 の  
眼 を 感 じ

気持と気持がびったり合うのは親  
子であるからで、他人の子の気持  
ははかり知れない。

泥 税  
棒 金  
に に  
も と  
と ら  
ら れ  
れ

番犬がいたが孕んでいたためか鳴かず泥棒に入られた。その頃農業と給与との総合所得税にも泣かされた。

氏 神 へ  
く ど く ど  
こ と に す る  
言 わ ぬ

頭をさげて柏手を二つ三つ打って  
おけばよい。ぶつぶつぶやいて  
もいかほどの効果があろうか。

手  
に  
つ  
い  
た  
靴  
墨  
も  
生  
活  
か  
こ  
れ  
も

自分の靴は自分の手で磨く習慣を  
つづけて来た生活だった。靴墨が  
手につけばやはり石鹼で落さねば  
なるまい。

は 残 ご  
げ し 先  
ま た 祖  
さ 花 の  
れ に

先祖からのさくら、梅、百日紅毎年花をつけて子孫をはげましてくれる。ありがたいことだ。

鶏 た ブ  
が へ リ  
飛 け キ  
び ば 缶  
上  
り

飛び上るのを見るのがおもしろい  
からだ。産卵率がへることも知ら  
ずに。

あ 男 味  
り が 噌  
あ 炊 汁  
ま け を  
り ば

ありあまってもかまわない。その  
次にまたその次に備えられる。――  
男の哲学。

貧乏にいて  
童心を  
大事がり

こんな時代もあった。やはり子供は可愛い。親の物は買わず食べるものを減らしても。

父　　箸　　煮  
ち　　で　　え  
や　　す　　て  
ん　　き　　来  
の　　や　　る  
　　き　　

すきやきのはじまりは父にまかせ  
られている。生唾をのむ子供の顔  
がならんでいる。たのしい夕餉の  
においだ。

ひ と さ ま に て  
一 歩 お く れ て  
行 く こゝろ

こんな心を持って暮したばかりに  
泣かず飛ばすの人生となる。けが  
をすることはなからうが。

父 茶 灯  
が の が  
い 間 明  
る の か  
だ し  
け  
で

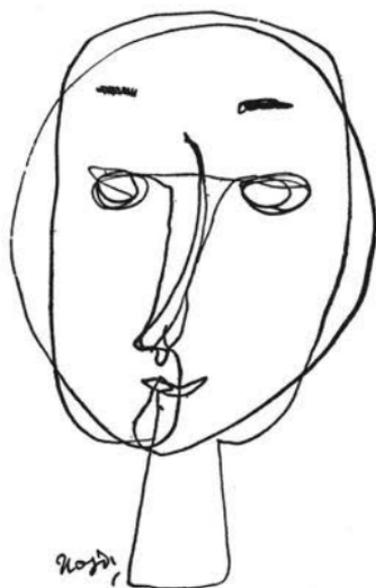
娘が好きな句で、ろうけつ染めに  
してラジオにかけてある。その父  
がなかなか茶の間にはいないのだか  
ら困ったものだ。

左 勤 下  
遷 め 向  
さ て い  
れ お て  
れ  
ば

心のどこかに隠されていると思わ  
れる気持のあらわれかも知れぬ。  
上向いておればどこまで出世して  
いたか。それは未知数だ。

---

句会・雑誌など



老  
い  
ら  
く  
の  
恋

ハ  
ン  
カ  
チ  
に

し  
わ  
が  
あ  
り

路郎先生選の山陽新聞柳壇「ハン  
カチ」第一席の句。ハンカチのし  
わはしみったれを詠んだつもり。

ハ  
ン  
ド  
ル  
へ  
た  
が  
ぶ  
た  
こ  
の  
ゆ  
で  
ら  
さ  
が  
り

年をとると体裁を考えなくなる。  
かえってうまそうな晩酌のおかず  
だろうと人に見せた方がよいでは  
ないか。

鼻をかむ男  
をよせ  
男のしわをよせ

神戸から大阪まで通勤していたころの車中、前にいた男の動作で鼻をかむ男まで出て後が出ない。大阪へ電車がついて降りたとたん句になった。

け ち ん ぼ に  
う つ か り 言 え ば  
損 に な り

うっかり言うたのがこちらのお人  
好しで、前からわかりきっていた  
相手であった筈。

も  
う  
先  
が  
来  
ま  
し  
た  
保  
険  
金

養老保険満期。さてこの十万円であと何年生きて行けるかしら。

受け出した  
時計のねじ  
をかけて出  
る

とまっていた自分の時計。時計に  
はすまなかったが自分も苦労した  
んだ。さあいま何時ごろかしら。

旅　　女　　来  
た　　あ　　る  
の　　ん　　気  
し　　ま　　配  
の

あんまは女を注文した。旅の宿。  
やはり女の方が色気があってやさ  
しくてよい。



の 新  
ぞ 婚  
か の  
れ 借  
そ 家  
う  
に  
灯  
き

のぞいて見たい心理はわかるが、  
そっとしておいてあげようではな  
いか。

役 人 の  
子 が 来 て  
や め に す る  
輪 投 げ

役人の子の言葉つかい態度は平民の子のそれと違う。大体しつげがちがうのだから肌が合わない。

美 容 院  
よ ろ め き の 顔  
か く し て 出

よろめきの顔はどんな顔かわからない。わからないからよいのである。

朱 門 子  
に 出 を  
染 の さ  
ま の と  
る ま し  
な る  
よ  
と

親の気持はそうであろうが、真赤に染まらないまでもうす桃色ぐらゐに染まらねば世渡りはできまい。

ま  
つ  
さ  
き  
の  
涙  
の

肉  
身  
か  
ら  
の  
も  
の

それはそうであろう。肉身は他人よりも詳しく事情を知っているから。

消えようとする  
印象を  
大事がり

大事がる人はきわめてすくない方がよい。その他の人はあつさり忘れられてよい。あまりにも人間が多すぎる。

用　　つ　　ど  
が　　ん　　う  
出　　ぼ　　し  
来　　と　　て  
　　　　話　　も  
　　　　す

つんぼは真面目、話す方は笑顔で  
ある。この場合屋外より屋内の方  
がよい。

催 促 へ  
小 さ く  
五 円 札  
折 っ た

昔の五円札は大金であった。百円札の面影も今は思い出せない。

し 母 嘘  
つ を つ  
け 見 い  
糸 お て  
ろ  
す

こんな極道者、それでも母は銘仙の着物を仕立てゝくれた。

あ か ぎ れ の  
手 で 道 楽 へ  
着 せ か け る

思い出す亡母の手は荒れていた。  
足もあかぎれが絶えなかった。風  
樹の嘆。

人形はさびし  
わたりしもさ  
さびしい娘

路郎師選新聞柳壇「人形」第一席  
に抜けた思い出がある。もらい手  
がなく恋人も見つからぬ娘。

相 傘 の 下 で  
ま た 逢 う  
日 が き ま り

二人に相傘がうれしい上に次の日  
がきまったたのしき。よいことば  
かりだ。

良 心 が  
ま ば た き を し た  
出 来 ごと  
ろ

これは良心に恥じる行為かも知れぬ。行為の後でまばたきをしたのではもうおそい。

よ  
ろ  
め  
き  
の  
心  
へ  
赤  
の  
交  
又  
点

うしろ髪を引かれながらよろめきの道を歩けば信号は赤になった。この立ち止る一分間が岐路となる。

工 単 工  
面 車 面  
し で し  
に た  
出  
か  
け

みんなが買うから俺も買った単車  
ではあるが、その単車で金の工面  
をしに風を切る。

消 防 の  
は つ び を 着 れ ば  
気 が 変 り

平素はゆっくりしているのが、と  
たんに生き生きとして一行と忙し  
く歩き回る気分転換のはっぴ姿で  
ある。

小 走 り の  
下 駄 が  
き れ い な  
音 を 立 て

いまごろはほとんど聞くことので  
きぬなつかしい昔の音である。

ひ の 日  
る び の  
が ろ 丸  
え の は  
り び  
ろ  
と

連戦連勝の時代もあった。が連戦  
連敗に終ってしまった。苦い思い  
出だ。

合 唱 の 中 で  
日 本 を  
思 う な り

制服制帽ゲートル履きの整列である。その時は勝たんかな戦わんかなでいっぱいであった。

金 誰 話  
売 か し  
つ と た  
て  
い  
気  
持

なぜあんな気持になったのか。いま思い出しても不思議である。金は「かね」ではない「きん」である。

## あとがき

みんなが次々と句集を出版されるので、  
もいつかは出したい気持は持っていた。

昨年秋指を折って見ると昭和八年十月に川柳をはじめたのであるから本年で三十年になる。鉄道も三十年たつと功績章をもらえるのだから三十年を記念して句集を出そうと決心した。

昨年十一月本社句会に出席した後で路郎先生にご相談申し上げたところご賛成を得たので、勝手なことながら先生にいつさいをお世話してもらうこととして句集刊行に踏み切っ

た。

私の句集は句の羅列という型式をやめて一頁に一句をのせ全部で百句とし、その隅に思いついたことや感想を述べることにした。

年が明けてから百句の生み出しに三十年間の記録をひろげて百二十句ほど抜き出した。その百二十句をもう一度自選して見ると、これが久米雄の句でございませうと言えりわゆるまずまずの句が二十句ほどしかない。

百句のなかで八十句自信がないとすれば、  
多くの句集として値打ちがない。どうしたものでか先輩同輩に相談して見ると自信句が二

十もあればぜいたくすぎる。一生を通じて一句あればよいではないかということになり予定どおり出版の運びとなったのである。

句集にまとめて見ると三十年の川柳生活がいつの間にか過ぎていたこと、川柳を通じてたくさんの方々の魂の交際ができたこと、自信句が作れなかった悔み、句会の思い出、入選のよろこび、故人となった人の面影など走馬燈のように過ぎて行く。

句は多くの身辺句が多いからこの句集には多くの性格やら生活の記録が多分に出ていると思う。句集を通じてはくがどんな人間であ

るかを知っていただければ幸いである。

句集の刊行について序文をいただき、印刷製本その他いっさいをお引受け下さって、多くの考えていたものより数倍の価値ある句集にして下さったご厚情に対し満腔の謝意を表し先生がいつまでもおすこやかで柳界のためにご尽瘁あらんことを祈っている。

昭和三十八年文化の日

岡山市弓之町鉄道宿舎にて

浜田久米雄

## 浜田久米雄略歴

**業歴** 本名太郎、明治四十三年一月十三日岡山県和気郡吉永町福満に生まれる。小学校は神戸市西出町入江小学校に、後岡山県立閑谷中学校を昭和二年卒業、同年九月国鉄に就職、宝塚駅、尼ヶ崎駅、安治川口駅、兵庫駅、新川駅、和田岬駅を経て昭和八年大阪鉄道局経理部に勤務、昭和十一年広島鉄道局経理部、運輸部に勤め昭和十九年岡山鉄道管理局の前身岡山管理部業務課に転じ自宅から通勤す。昭和二十四年岡山駅乗客掛主任を命ぜられ、後、能率助役となる。昭和三十三年伯備線足立駅長となり翌年再び岡山駅庶務助役、三十五年三十六年と岡山駐在運輸長付に転じ三十七年岡山車掌区首席助役となり今日に至る。昭和四十年三月定年退職の予定。現住所岡山市弓之町鉄道官舎。

**柳歴** 昭和八年十月勤務先の大阪鉄道局内にあった川柳雑誌社大鉄局支部畔柳社に入会川柳生活の第一歩を踏み出す。麻生路郎先生、故福田山雨楼、故西田岬楽氏に師事す。

昭和十年兵庫支部柳柳社を創設。昭和十一年十月広鉄局へ転じて直ちに故九天らと図り広鉄局支部を創立。

岡山へ転ずる前に九坡らと図り昭和十四年岡山支部を創立して現在に至り、支部長を担当している。なお昭和二十三年に備前支部を郷里吉永町を中心として創立して昭和三十二年まで支部長を勤めた。またNHK聴取者文芸川柳の選評を受持ったことあり現在山陽放送川柳の会の選評を風来子、十九平氏と交替で受持っている。川柳雑誌社不朽洞会員、国鉄川柳全人連盟会員。

昭和二十八年十月二十日印刷  
昭和二十八年十一月三日発行

川柳叢書  
川柳句集・凡人



発行所

価 三〇〇円

著者

浜田久米雄

発行者

麻生幸二郎

大阪市住吉区万代  
西五丁目二五番地

大阪市住吉区万代  
西五丁目二五番地

川柳雜誌社

電話大阪空一局 六八番  
振替大阪七五〇五〇番

麻生路郎主宰 創刊大正十三年

# 川柳の雑誌

★本誌は斯界の最高峰の柳誌、内容の充実と誌代の低廉は本誌の誇りとするところ。現柳壇へ幾多の名家を送り出した本誌は貴方が柳壇への登竜門として選ぶべき最良のものである。即刻申込ませたい。

深く研究を続けた人々の  
ためには川柳不朽洞会へ  
入会の便宜がある。

誌代一部	一二〇円	送料六円
半力年	七五六円	千 共
一力年	一、四四〇円	千社負担

入門も奥義も『川柳雑誌』から

## 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地  
電話 大阪 卍 6081番 振替口座 大阪75050番

川柳雜誌社版